



特選 ぶらんこの揺れを残して始業ベル

松原町 中島 房女

(評) 始業ベルが鳴る前は溢れるほどの子どもで賑わっていた運動場です。ベルとともに風景が一転します。人・声・音を含めて動と静の雰囲気の違いを「ぶらんこ」に絞って表現されているところが印象に残りました。(幸司)

入選 水澄むや偽り多き世に住みて

東近江市 松本 ちずる

(評) 秋はものみな澄みわたる季節であり水もまた美しく澄んでいます。人の世はいつも水のように澄んだものではありません。だからこそ、澄んだ心で生きていきたいという素直な心に共感しました。(幸司)

入選 さざ波の広がる濠や東風の城

京町一丁目 堀井 叔子

(評) お濠のほとりを歩いてみると、小刻みにさざなみが寄せている。それは春になって吹く風即ち東風である。その向ふに天守閣が見える。東風の城と下五にもって行って一句を成立した。(章子)

特選 能舞台静寂にひそむ余寒あり

米原市 奥村 和子

(評) 鏡板に描かれた「老松」「若竹」のみ鮮やか鼓の音も笛の音もない静寂につつまれた能舞台に佇んだ作者、華やかなれど余寒を感じたといふ作者、共感を覚える一句。(章子)

入選 膝小僧二十が並ぶ初諷経

高宮町 細田 恵貢子

(評) 膝小僧が二十と言うと十人である。お正月に家族揃って、御仏やお先祖への初諷経なのであるうか、それとも村のお寺の本堂なのであるうか、どちらにしても朗朗たる諷経は身の引き締まる心地のするものである。(栄子)

特選 城を背に身を躍らすや出初式

大藪町 吉田 和治

(評) 梯子の上で次々と繰り出される技の素晴らしさと躍動感が、まるで目の前で見ていくかの様に伝わってくる。その上、背景に城を詠み込んだ事により、彦根の出初式らしさが目く表現されている。(栄子)

入選 背の高さ揃ひて麦の青さかな

清崎町 村田 惇一

(評) 麦の若葉が出揃い穂が出るまで春先の風景です。一面に萌えた麦の若葉の緑は目にも鮮やかなものです。「背の高さ」や色彩を表す「青」から一幅の絵画を見ているような気持ちになりました。(幸司)

入選 くれなるに山くれなるに秋深む

米原市 成宮 義雄

(評) 秋の深まりと共に、辺りの山も紅葉して美しい。リズムカ
ルに詠まれて、秋の深まりを感じる。(章子)

入選 丈六の佛閑けき白牡丹

城町二丁目 福原 芳江

(評) 丈六は一丈六尺でお釈迦様の大きさと言われている。境内
に牡丹が植えられている所は結構多いし、種類も多い。その
中で紅牡丹では閑けきと合わないし、白牡丹の持つ清浄さこ
そが、閑けきに似合うものと推察する。(栄子)

入選 春深し昼を灯せる古書の店

長浜市 樋口 満智子

(評) 古書店というと薄暗いイメージがつきまとうが、掲句もや
はり昼灯しと詠んでいるので、薄暗いのであろう。所狭しと
足の踏み場のないくらい並び、積まれた書籍こそが、古書店
の醍醐味のようにも思えるし、そこはかとした哀愁も感じ取
れる。(栄子)

入選 立春の光束ねて鍬を打つ

出町 山西 勘次

(評) 冬から春への季節感が「立春の光」の表現に集結しています。
春の訪れを待っていた気持ちだが、大地に向かって鍬を打つと
いう心意気から伝わってきます。「光束ねて」は印象に残る
表現です。(幸司)

入選 字余りのやうな心地の風邪に臥す

東近江市 坂口 靖子

(評) 病気の症状によってその時々気分が違いがあります。そ
れを適切に表現する言葉は、身近にあるようでなかなか見つ
からないものです。「字余り」は読んでいてなるほどと納得
しました。(幸司)

入選 梅干してまだまだ生きる気力あり

堀町 川分 洋子

(評) 梅を漬けることは、日本人として古来よりのもの。作者も
沢山漬けて三日三晩の夜干しもされたことと、それによつて
生きる気力が湧いてきた作者。(章子)

入選 ひと握り程のひだまり寒雀

西今町 前田 弘子

(評) ひと握り程のとは旨く言ひましたね。その日溜りを求めて、
雀たちが二・三羽集まってゐる光景が伝はつて来ます。作者
のやさしい気持ち、寒雀がいいですね。(章子)

入選 風光る波に綺羅めく札所船

長浜市 勝木 岩松

(評) 神の島と呼ばれている竹生島への定期船であろう。竹生島
は西国三十三箇所の第三十番札所でもある。晴れ渡った湖に
光り輝きながら航行する白い船。掲句は波の綺羅めきを言わ
ないで、船が綺羅めいていると言っている。そこに惹かれた。
(栄子)

佳作 藤の花崩れし棚のままに咲き

古沢町 戸成晴美

佳作 閑宿や丸ごと雛の宿となる

芹橋二丁目 秋山栄子

佳作 寒肥の今日の日和を逃がすまじ

佐和町 大久保豊子

佳作 湖の香の朝餉に上る蜺汁

野田山町 善利幸子

佳作 丸見えの孫の手品や家の春

東近江市 小林清次郎

佳作 風までも軽くなりけり更衣

東近江市 河崎章

佳作 大琵琶の風引き寄せて行くヨット

犬上郡豊郷町 元持和子

佳作 乗り換への二分に峡の轉れり

西今町 勝又千恵子

佳作 住みなれし村が一番路の臺

正法寺町 高井豊

佳作 豊の秋土間に二俵の米届く

松原二丁目 松林秀香

佳作 憂きことは聞こえぬ耳の涼しさよ

米原市 西村てる子

佳作 明け方の湖にかたむく朧月

大東町 吉田芳子

佳作 金の蕊見せぼうたんの咲き誇る

日夏町 寺村澄子

佳作 梅雨明や一気に空の広がりし

後三条町 北村しげ子

佳作 一腑欠く老いにやさしき路のとう

中藪町 山川美江

佳作 確かなる大地の息吹き路の臺

東沼波町 山田繁雄

佳作 浦里や花爛漫に九十九折

大津市 的場 功巳

佳作 湖からの風に城址の梅にほふ

外 町 筑田 豊子

佳作 豪商の栄華を偲ぶ雛飾り

小泉町 北村 邦彦

佳作 一斉に振り向く眼と眼鹿の群

鳥居本町 寺村 美恵

佳作 箸と云う文化の似合う蜆汁

下西川町 古川 たけ

佳作 沈みゆく夕日背負いて蕪をまく

長浜市 野口 成人

佳作 金盞花そへて佛花の仕上りし

松原町 北川 喜里恵

佳作 紙雛を飾りはなやぐ介護部屋

稲里町 勝見 政恵

佳作 一徹の不作を言はず冬耕す

長浜市 近藤 甚一郎

佳作 肩中の太き青年風光る

高宮町 前川 管子

佳作 春めきぬ通ひ馴れたる城ガイド

地蔵町 佐古 徳子

佳作 四方晴れて木々のときめき新樹光

米原市 藤川 耕心

佳作 日矢まぶし城の裏坂木の芽晴

馬場二丁目 清水 はる

佳作 暫くは目を奪わるる春の虹

芹橋二丁目 大野 ゆう子

佳作 一枚も残さぬ根気落葉掃く

外 町 知田 照子

佳作 伊吹嶺を再び覆ひ忘れ雪

米原市 日比 陽子

佳作 ポケットに秋を忍ばせ苑巡る

甘呂町 日和田 喜美子

佳作 石畳時雨て光る寺の町

中央町 辻 榮津子

佳作 子の丈を越す菜の花や通学路

高宮町 松本 麻里子

佳作 水温む緋鯉の口の丸きこと

日夏町 林 正子

佳作 その昔回転橋あり月冴ゆる

松原一丁目 金沢 湖世

佳作 柿たわわ夕陽を受けし過疎の里

米原市 松村 武温

佳作 指先に土の香残し大根干す

犬上郡豊郷町 田中 マサ子

佳作 晚鐘の余韻春愁解ほどきゆく

日夏町 寺村 しげる

佳作 肅肅と湖北神事や鮒脍

米原市 松田 喜美子

佳作 どころなく風の膨らみ山笑ふ

米原市 田辺 仁美

佳作 ありがたう夫のひとこと桜餅

本町一丁目 中島 暉枝

佳作 手斧跡残る古城に月明り

米原市 西尾 辰之

佳作 豌豆の花の粒先ふくらみ来

甘呂町 小野 和子

佳作 春浅し平穏なれば佳しとする

八坂町 物部 盛弥

《総評》

沢山の秀句の中から、特選、入選、佳作と幾度も味わいながら選をしてゆきました。

どの句も生き生きとしていて、景色や心情が浮び上がってくる句ばかりでした。彦根は湖あり城あり歴史ありと、作句の環境にも恵まれていると思いますので、多作を目指し吟行に出掛けていただければ幸いです。

ひと頃に比べると彦根の俳句人口も少なくなってきましたので、淋しい気もしますが、これも高齢化のせいなのかも知れません。あちこちで開かれている句会へと、ご近所の皆様に声をかけてみてください。そして来年は今年より、少しでも多くの方に参加していただける事を願っております。

北川 栄子

令和元年度といふ意義ある年に、選者の一人として参加させていただきます。ただき光栄に存じます。

彦根は元来俳句の盛んな土地で多くの俳人があつて、いつしか私も誘はれて、楽しく苦しみながら今日に至つてをります。

俳句は「心の眼でよく見よ」と教はりました。そしてそれを如何に表現するかで「一句」が名句にも駄句にもなります。沢山作り沢山捨てる事、俳句には卒業と言ふ事はありません。私も死ぬまで苦しみ続けることと思ひます。

野瀬 章子

応募作品は、風景や季節感、作品に込められた気持ちを豊かに表現されていますし、どの作品も印象に残るものばかりでした。

俳句は短い言葉を紡ぐのですから表現に限りがあります。見たこと、感じたことの全てを一つの作品に押し込もうとすると無理があります。一番伝えたいことを言葉にするということが大事です。

このような考えから、多くの応募作品から、風景が見えるもの、空気が伝わるもの、生き方や考え方が印象的、あるいは共感できる作品を選をするうえで拠り所としました。

俳句は、前書きも追伸もない最も短い自分宛の手紙である。俳句の自然諷詠・生命諷詠は自分への応援歌であるという意味のことをどこかで聞いたことがあります。自然や人間の生命に対する愛しさや慈しみが短い言葉で紡がれているということでしょうか。俳句を作る、鑑賞するという時間が日常に気軽に持てるといいなと思っています。

吉永 幸司

選者吟

塔巡る惜春の歩の躓きつ

北川 栄子

葉ざくらに納経の墨句ふなり

野瀬 章子

紙風船母の息足し子に渡す

吉永 幸司